

‘風の谷のナウシカ’にみる、登場人物の話体

— 対人間関係における言語行動 —

A Study of the Speech Styles of the Characters Seen in the Movie

“Nausicaä of the Valley of the Wind”

~On Verbal Behavior in Interpersonal Relationships~

高 橋 永 行

Nagayuki Takahashi

山形県立米沢女子短期大学

『生活文化研究所報告』

第45号 抜刷

2018年3月

‘風の谷のナウシカ’にみる、登場人物の話体

— 対人間関係における言語行動 —

A Study of the Speech Styles of the Characters Seen in the Movie
“Nausicaä of the Valley of the Wind”
~On Verbal Behavior in Interpersonal Relationships~

高 橋 永 行
Nagayuki Takahashi

要旨：宮崎駿監督作品‘風の谷のナウシカ’は登場人物に典型的な役割語を使わせて描かれている。私たちが現実世界で行う言語運用のメカニズム（語用論）と対比しながら作中の台詞と言語行動について考察した。現実世界でみられることばの位相がどのように創作物に投影されているか、二人のヒロイン、ナウシカとクシャナを中心にポライトネス理論のフェイス概念に基づき、談話単位で用例を示し検討する。ナウシカは女性語と男性語を併用する話体である。「風の谷の姫」という立場で積極的フェイスを保持し、やわらかいことば遣いと毅然としたことば遣いを場面ごとに切り替えるが、16歳という年齢に相応したステレオタイプの言語行動がみられる。一方、クシャナは男性語専用の話体である。トルメキア王国の姫であるとともに侵略軍の司令官という立場で消極的フェイスを守ろうとするため、聞き手のフェイスを否定的に評価する方略を多用し、高圧的な印象を見る側に与えるが、随所に周囲への配慮がみられる。登場人物たちは互いの人間関係に向き合って言語行動を選択していると言えよう。

キーワード：言語行動 (verbal behavior)、役割語 (role language)、語用論 (pragmatics)、ポライトネス (politeness)、フェイス (face)、ナウシカ (Nausicaä)

はじめに

アニメーション映画‘風の谷のナウシカ’は、宮崎駿監督により1984年に制作された。ヒロインのナウシカの名は古代ギリシア文学の『オデュッセイア』第6歌に登場するスケリア島の王女ナウシカアからとられ、人物像は日本の平安文学作品『堤中納言物語』に登場する蟲愛づる姫君から着想を得て形成されたという（注1）。この作品ではナウシカを中心に、役割語としての典型的な女性語、男性語、老人語、若者語などを各キャラクターに使わせている。高橋（2016）で述べたように、創作物には現実社会で形成され、ステレオタイプ化した言語イメージが投影される。登場人物、とりわけ二人のヒロイン（ナウシカとクシャナ）に焦点を当て、彼女たちが使う話体（ことば遣い）にはどのような特徴があるのか、また、どのような言語行動がみられるのか、現実世界の私たちの言語行動と対比しながら考察してみたい。

1. 作品の概要とヒロインの言語特徴

作品設定は、『ANIMEGE COMICS ワイド判 風の谷のナウシカ』1（1983）の裏表紙に次のように記されている。

かつて栄えた巨大産業文明の群は時の闇の彼方へと姿を消し、
地上は有毒の瘴気を発する巨大菌類の森・腐海に覆われていた。
人々は腐海周辺に、わずかに残された土地に点在し、それぞれ王国を築き暮らしていた。
-風の谷-そこは人口わずか500人、海からの風によって
かろうじて腐海の汚染から守られている小王国であった。

腐海を焼き払ってでも力で解決しようとするトルメキア王国と自然との共生を目指す風の谷の人々との姿勢の違いは、王国第四皇女クシャナと風の谷の族長の娘ナウシカという二人の「姫様」の対比により鮮明に描かれている(注2)。斎藤美奈子(1998)は、二人とも知力と武力に秀でた「姫様」であること、ヒロインではなく、ヒーローの立場にあることが共通し、そのため、「中途半端な女らしさ」とは無縁であることを述べ、「ナウシカとクシャナは、男性ヒーローの性格を女性の肉体に移植したような「英雄」だ。男のヒーローを手本にした女性像。」と評する。

映画の終盤、風の谷で人々は占領軍に抵抗し、トルメキア軍と対峙する。この戦闘の過程でトルメキアの捕虜となってしまった城勤めをする老人(城オジ)たちが「あんたも姫様じゃろが わしらの姫様とはだいぶちがうの」ということばをクシャナに向かって言う場面がある。米井力也(2011)は、この台詞に作品の言語表現の性格が端的に示されていると指摘し、作品中の人物設定と話し方の特徴を説明している。金水敏(2003)の定義(注3)にしたがって「この登場人物のせりふを分類すると、役割語としての〈老人語〉・〈若者語〉・〈男性語〉・〈女性語〉の典型的な言い回しが多用されていることがわかる。…中略…ナウシカとクシャナという「女のヒーロー」にははっきりとしたちがいが見られる。」として、二人の姫のことば遣いを次のように整理している。

ナウシカは、場面に応じて〈女性語〉と〈男性語〉を使い分ける。

- ① 命令依頼表現は連用形中止法を用いる(急いで、殺さないで、やめて)。
命令形でも丁寧表現が一般的である(捨てなさい、帰きなさい)。
- ② 文末表現で女性語らしさを繰り返す(一年半ぶりですもの、うまく飛べないの)。
- ③ 男性語を用いる場面がある。父を殺されたとき敵の兵士に対して叫び(おのれえー)、墜落寸前にガンシップで脱出するとき、クシャナに対して命令表現で呼びかける(来い)。
- ④ 普段尊敬語を用いることはないが、ぞんざいな言い方ではなく、親しみを込めた言い回しを用いる(すぐ行くわ)。

一方、クシャナは、部下に命令を下すときも、風の谷の人々に語りかけるときも一様に〈男性語〉を用いる。

- ① 命令依頼表現は一貫して命令形を用いる(やめろ、言わせてやれ、参加せよ、間違えるな、動くな、焼き払え)。
- ② 容姿と表情以外に〈女性性〉を感じさせる面はまったくない。
- ③ 二人称代名詞は「おまえ、おまえたち、きさま」を用いて「あなた、あなたたち」は一度も用いることがない。

2. 位相語(様相・差異・変種)と役割語(ステレオタイプ)

前節でみた男性語・女性語という見方は位相語の中の分類の一部である。

現実のことばは、話す人の属性(集団・階層、性別など)、使用する場面、伝達手段(対面・電話・メール・匿名の投稿など)の違いによってさまざまに異なった姿をみせる。このような現象をことばの位相といい、位相によって表現の異なりがみられる語を位相語という。

米川明彦(2002)では、位相語を(1)社会的位相に関するもの(男性語・女性語、幼児語・若者語、隠語、業界用語、方言など)、(2)様式的位相に関するもの(話しことば・書きことば、手紙用語、メール用語など)、(3)心理的位相に関するもの(美化語・敬語・差別語など)の3領域に分けて説明する。

私たちは、話し方と人物像を結びつける知識を共有している。現実(Reality)世界でのことばと仮想現実(Virtual Reality)世界でのことばを関連づけ、現実の言語差異に基づく知識としての言語特徴を役割語として認識している。つまり、位相語は現実社会で観察できる具体的な言語であるが、役割語は個々人が現実に対して持っている観念的な言語であり、言語上のステレオタイプということである。

ステレオタイプとは、あるカテゴリーに属する事物に対して定型的なイメージをもつことといえる。ある種の類型化がなされたキャラクターには、それに「ふさわしい」ことばづかいがある、という知識も共有している。したがって、アニメーション作品で描かれている、現実には存在しない「平安時代から来た貴族の子ども」、「小学生になった高校生」、「ことばをしゃべる猫型ロボット」などにもそのキャラクターにふさわしいことばづかいを私たちは受け入れている。‘風の谷のナウシカ’においても、二人の姫に「ふさわしいことば」が設定されていると考えられる。

3. 対人間関係と言語行動

私たちは社会においてことばを選んで使うという行動をする。その根底にあるものは何だろうか。コミュニケーションには、「ふさわしき」の共有が必要である。しかし、「ふさわしき」というイメージを持っているだけではその場にふさわしいとされることばを運用することはできない。対話は、話し手と聞き手相互の言語行動規範に基づくものである。その言語運用のメカニズム(語用論)について考察するとき、ポライトネス(politeness)理論を援用する方法がある。ポライトネスとは、対話においてお互いのフェイス(face)を侵さないために行う、相手に対する態度(対人的Modality)、配慮行動のことをいう。

配慮表現について野田尚史(2014)は、「現実のコミュニケーションでは重要」であり、「配慮表現の研究は、言語形式から出発するのではなく、互いの人間関係を含めた場面や状況から出発し、そこでどんな言語形式が使われるのかを分析するという方法を取るようになる。」と述べる。創作物はステレオタイプ化して描くことで、人間関係や状況などを共通理解、共通認識(共有化)することが可能である。

配慮は対話のしやすさにも関連する。姫はその立場を明確にすることで、相手も話しやすいといえよう。

4. 二人の姫のフェイス(face)

人々は一般的には互いのフェイス維持のために努力する。Goffman(1967)は、フェイスの基本概念を「他者から承認された社会的属性という形で描かれた自己イメージ」と定義する。福田一雄(2013)は「他者からの承認と積極的な社会的価値を有する自分という自己イメージ」と解釈する。私たちは人間関係の維持とフェイスの保持に配慮し、円滑なコミュニケーションを目指すという社会言語行動をする。「円滑」や「配慮」は相手や自分のいずれかを優先するというわけではない。

‘風の谷のナウシカ’における「姫」というイメージは、「姫というフェイス」に他ならない。ここで、二人の姫の発話からそれぞれのフェイスについて考えてみたい。

会話は、複数の発話行為により成立するので、単独の発話ではなく、談話レベルでのアプ

ローチを行うため、できるだけ一つ的话题を単位として対話用例を抽出して提示する。

4. 1 ナウシカの言語行動と積極的フェイス

まずナウシカの、〈男性語〉と〈女性語〉の併用を確認しよう。相手に合わせて「話体」を切り替えとも言える。【N 1】では、城オジとの対話を引用した。対話例は宮崎駿監督作品『風の谷のナウシカ』（2010年7月14日発売のブルーレイ（BD））を視聴し、発話音声を書き起こした。なお、内容が確認できるように漢字仮名交じりで表記する。用例中の記号や下線等は筆者による。主な対話者、BDのチャプター（Chapter）番号、冒頭からの再生時間もあわせて示す。

【N 1】ナウシカとミト（城オジ） C5 0:21:13～

ミト 姫様 姫様

ナウシカ なあに ミト

ミト ゴルが風がにおうと言うとります

ナウシカ もうすぐ夜明けね すぐ行くわ ご苦労様さん

ミト いい嵐なんじゃが どうもおかしい

ナウシカ はっ あそこ ほら また 船だわ

ミト なぜこのような辺境に船が

ユパ 何事かね

ミト ユパ様 船です

ナウシカ 来るわ

ミト 大きい

ユパ トルメキアの大型船だ

ナウシカ 飛び方がおかしい 不時着しようとしている ゴル あげて

ゴル え？

ミト 姫様 無茶じゃ

ナウシカ 海岸に誘導する

ミト 回って来たぞ ええい 行きますぞ

ナウシカ テトっ

ミト うりゃ

ナウシカ なんてことを 腐海に降りて虫を殺したんだわ
舵を引けー ぶつかるぞー 舵を引けー 舵をー

城オジたち4人は、どんな相手にも一様に〈老人語〉を使う（注4）。【N 1】では、ミト（城オジ）はナウシカに対して、「ですます調（敬体）+老人語」という一つのスタイルを通す。一方、ナウシカは、ですます調を使わないが、やわらかいことば遣いで相手に親しみをこめた話体である。これは、慕ってくる谷の子どもたちや同年代のアスベル（ペジテ市の王子）に対しても変わらない。とりわけ文末詞に〈女性語〉らしさが現れている。【N 2】ではアスベルとの対話例を引用する。

【N 2】ナウシカとアスベル（ペジテ市の王子）C15 1:07:56～

アスベル ラステルは ぼくの双子の妹なんだ そばにいてやりたかった

ナウシカ ごめんね 話すのが遅れて

アスベル いや すまなかった
 妹をみとってくれた人を ぼくは殺してしまうところだった
 ナウシカ ううん
 アスベル そうか あいつは風の谷にあるのか
 ん うーん あーっ 不思議な味のする実だね
 ナウシカ チコの実というの とっても栄養があるのよ
 アスベル ふーん 味はともかく 長ぐついっぱい食べたいよ
 ナウシカ うふふ
 アスベル 腐海の生まれたわけか 君は不思議なことを考える人だなあ
 ナウシカ 腐海の木々は人間が汚したこの世界をきれいにするために生まれてきたの
 大地の毒を体に取り込んで きれいな結晶にしてから
 死んで砂になって行くんだわ この地下の空洞はそうしてできたの
 アスベル 蟲たちは その森を守っている
 だとしたら ぼくらは滅びるしかなさそうだ

アスベルの年齢設定は、ナウシカと同じ16歳である。上品な男性の若者語を使う。一人称は「ぼく」である。ナウシカが「とっても栄養があるのよ」と「のよ」を用いるのに対して、アスベルは「長ぐついっぱい食べたいよ」と「よ」を使うなど、文末詞にも男の子らしさがみられる。ナウシカも年齢相応の話し方であり、丁寧な女性の若者語を使う。姫と王子は立場上対等の関係といえる。アスベルもナウシカと同様に敬体ではなく常体で話す。

しかし、ナウシカは、命令する立場を明確にする必要があるとき、あるいは敵対する相手と戦闘するときには〈男性語〉を使う。【N3】は、物語の終盤、腐海の主、王蟲の群れが風の谷に向かって暴走した原因を至急探る場面である。

【N3】ナウシカとミト（城オジ）C20 1:35:00～

ナウシカ エンジン スロー 雲の下へ降りる
 ミト なんじゃ この光は
 ナウシカ 王蟲
 ミト 腐海があふれた 風の谷に向かっている
 ナウシカ なぜ どうやって王蟲を 誰かが群れを呼んでる
 ミト シリウスに向かって飛べ
 ミト はい
 ナウシカ いるっ ミト 照明弾 用意 テュッ（撃て）
 ミト なんだあれは
 ナウシカ ああっ なんてひどいことを
あの子をおとりにして群れを呼び寄せてるんだ
 ミト くそっ たたき落としてやる
 ナウシカ だめよーっ 撃っちゃだめ ミト やめて
 ミト なぜじゃ なぜ撃たせんのじゃ
 ナウシカ 王蟲の子を殺したら暴走は止まらないわ

この場面では、ナウシカは城オジのミトに対して「シリウスに向かって飛べ」、「照明弾用意テュッ（撃て）」と、簡潔で力強い男性的な命令口調で指示する。ペジテの残党からおとり

にされ、傷ついた王蟲の子を見つけた後は、「あの子」「だめよーっ撃っちゃだめミトやめて」など、女の子らしい口調になる。

ここでフェイスの概念を確認しておく。Brown and Levinson (1987) はフェイスを二つに分けて説明する。人は積極的フェイス (Positive Face, 自分を認められたいという欲求) と消極的フェイス (Negative Face, 他者に邪魔されたくないとする私的領域の保持) の2種類のフェイスを同時に持つが、発話の際にはいずれかが強く意識されているとする。この説明に基づけば、ナウシカは積極的フェイスが強く意識されているとみられ、自身の立場をわきまえて、相手・場面・状況に応じて積極的に〈男性語〉と〈女性語〉を切り替えると考えられる。

語用論的な見方では、同じ発話だとしても、話し方、場面、文脈などの条件により解釈は異なるケースが想定できる。したがって、ほとんどすべての言語行動は潜在的なフェイス・リスク (フェイス侵害行為の可能性) を持つことになる。そのため、Brown and Levinson (1987) では「聞き手の積極的フェイスを気につけない、無視する場合」や「露骨な非協力的態度—たとえば、聞き手の話に割り込む、関係のない話を持ち出す、話を聞かないなど」がフェイス侵害行為 (Face Threatening Act, 以下 FTA と略す) に当たるとする。福田 (2013) ではさらに「発話行為とは言えないような発話態度」も含まれると述べる。ポライトネスは FTA をしないように配慮することであるが、相手に対して何かを働きかけるとリスクが生じるという考え方が根底にある。

米井 (2011) で取り上げられた、ナウシカのことば遣いの特徴③「男性語を用いる」(父を殺した敵の兵士に対して叫ぶ (おのれえー)、墜落寸前にガンシップで脱出するとき、クシャナに対して命令表現で呼びかける (来い) など) で観察できる言語行動は、直言 (bald on record) にあたる。発話行為そのものにおいても、発話態度においてもフェイス侵害の軽減をしない。直言は意図伝達を明示的に行い、相手に配慮する状況にないときの発話である。このナウシカの〈男性語〉は、インポライトネス (impoliteness) にもみえるが、父を殺した敵兵に敬意を持つべくもなく、また、生命の危機が迫る機内においての呼びかけ (来い) はクシャナの命を救うためにほかならないので、必然的に「明示的な直言」で発話することを選んだということである。

〈男性語〉〈女性語〉を併用するというよりは、ナウシカは「友好・敵対、平穏・緊張、平時・有事」などの場面状況の違いにより、やわらかいことば遣いと毅然としたことば遣いを使い分けると言えよう。年齢に相応するある意味単純なステレオタイプ化した言語行動をとっている。

4. 2 クシャナの言語行動と消極的フェイス

ナウシカに対し、〈男性語〉専用のクシャナは消極的フェイス (私的領域の保持) をかたくなに守ろうとする。さまざまな人間関係の中で多様で複雑な言語行動が認められる。

【C 1】は、父を殺した敵の兵士に対して斬りかかるナウシカを辺境の剣士ユパが押しとどめたあとの場面である。

【C 1】クシャナとユパ C 8 0:33:57 ~

ユパ	ナウシカ	落ち着け	ナウシカ	今戦えば	谷の者は皆殺しになろう
					生きのびて機会を待つのだ
クロトワ	えーい	くそっ	小娘が		
クシャナ	やめろ	クロトワ	←	遮り FTA (クロトワへ)	
クロトワ	しかし	あーあ	なんてやつだよ	みんな	殺しちまいやがった

クシャナ ^{かんげん} 諫言 耳が痛い 辺境一の剣士ユパ・ミラルダとはそなたのことが
我らが目的は殺戮^{ぎつりく}ではない 話がしたい
剣を収められよ ← 軽い敬意(ユパへ)

－ (中略) －

クシャナと風の谷の人々 C 8 0:35:14～

ミト 姫様だ
(村人) 姫様

クロトワ 聞けっ トルメキア帝国 辺境派遣軍司令官クシャナ殿下のお言葉だ

クシャナ 我らは辺境の国々を統合し この地に王道楽土を建設するために来た
そなたたちは腐海のために滅びに瀕している
我らに従い 我が事業に参加せよ
腐海を焼き払い 再びこの大地をよみがえらすのだ

ミト 腐海を焼き払うだと？
(村人) そんなことできるのか

クシャナ かつて人間をして
この大地の主となした奇跡の技と力を我らは復活させた
私に従う者には もはや森の毒や蟲どもにおびえぬ暮らしを約束しよう

大ババ 待ちなされ 腐海に手を出してはならぬ

クロトワ なんだ このばばあ おい 連れて行け

クシャナ 言わせてやれ ← 割り込みFTA(クロトワへ)

大ババ 腐海が生まれてより千年 いくたびも人は腐海を焼こうと試みて来た

クシャナは、トルメキアの兵士を斬り殺したナウシカに挑みかかろうとした部下のクロトワ^(注5)を「やめろ」と制止し、ユパには「剣を収められよ」と敬意を込めたことばで語りかける。また、風の谷の大ババの発言を遮り、「なんだこのばばあおい連れて行け」と部下に命令したクロトワに対して「言わせてやれ」と割り込み、大ババのことばに耳を傾ける。

また【C 2】は風の谷を占領下においた後のクシャナとクロトワ、城オジとの対話である。ここでは逆に軍の司令官という立場を見る側に強く感じさせるような言語行動がクシャナにみられる。

【C 2】クシャナとクロトワ C9 0:38:39～

クシャナ なかなかいい谷ではないか

クロトワ 私は反対です 本国では一刻も早く巨神兵を運べと命令しています

クシャナ 命令は実行不能だ
大型船すら あいつの重さに耐え切れず 墜落してしまった

クロトワ しかし まさか本心でこの地に
国家を建設するなど(と) ←割り込みFTA(クシャナ)→

クシャナ だとしたら どうなのだ おまえはあの化物を
本国の馬鹿どものおもちゃにしろというのか? ←批判FTA(クロトワへ)

クロトワ そりゃまあ わかりますがね
私は一軍人にすぎません そのような判断は分を越えます

クシャナ ふん たぬきめ ←嘲笑FTA(クロトワへ)

クシャナ	私はペジテに戻る 留守中 <u>巨神兵の復活に全力を注げ</u> ←高圧的命令 FTA (クロトワへ)
クロトワ	はっ
クシャナ	このガンシップは使えるのか
クロトワ	はい 拾いものです
クシャナ	<u>間違えるな</u> <u>私は相談しているのではない</u> ←不同意の表明 FTA (城オジたちへ)
ミト	しかし 姫様をペジテにつれて行くなど

【C 2】の場面では、クシャナが聞き手のフェイスを否定的に評価する例 (FTA) を確認できる。Brown and Levinson (1987) に基づき、次の5種を提示する。

- (I) 批判 FTA 「おまえはあの化物を本国の馬鹿どものおもちゃにしろというのか？」
- (II) 嘲笑 FTA 「ふん たぬきめ」
- (III) 高圧的命令 FTA 「留守中巨神兵の復活に全力を注げ」
- (IV) 不同意の表明 FTA 「間違えるな 私は相談しているのではない」
- (V) 割り込み FTA 「だとしたら どうなのだ」

(I) ~ (IV) は直言形式の発話である。(I) ~ (III) はクロトワに対して、(IV) は城オジに対して意図伝達を明示的に行うものである。(V) は話し手の発話を遮り、割り込む「露骨な非友好的態度」をとるといふ、福田 (2013) で指摘された発話態度そのものといえる。クロトワが「国家を建設するなど(と)」と発話している途中で「だとしたら どうなのだ」と割り込み、相手を否認し、反論する。【C 1】でもクロトワに対して「やめろ」(割り込み)、「言わせてやれ」(遮り) という FTA がなされているが、これらはまた別の意図を潜在的に行うものである。「やめろ」は、ナウシカに斬りかかろうとするクロトワの行為を押しとどめるだけでなく、ユパとナウシカへの配慮がみられる。また、「言わせてやれ」は、大ババの発話を遮り連行しようとするクロトワの行為を中止させるだけでなく、異国の年長者に対する配慮(敬意)が認められる。

また、クシャナのクロトワに対する発話態度には、明示的な伝達方法だけではなく、非明示的な方法もみられる。【C 3】は、風の谷の人々が立てこもる廃船を見ながらクシャナとクロトワが対話する場面である。

【C 3】クシャナとクロトワ C19 1:31:28 ~	
クロトワ	てこでも動きそうにありませんなあ
クシャナ	帰りを待っているのだ
クロトワ	帰り？
クシャナ	あの娘がガンシップで戻ると信じている
クロトワ	ガンシップはやっかいですなあ 今のうちにひと当てやりますか
クシャナ	おまえはあの船が何だか知っているのか
クロトワ	火の7日間の前に作られたやつでしょ うそかほんとか知らねえが 星まで行ってたとかなんとか えらく硬いから砲も効かねえが なあに穴にぶち込めば ←割り込み FTA (クシャナ) →
クシャナ	<u>私も待ちたいのだ</u> ← off record 開始
クロトワ	え？

クシャナ 本当に腐海の深部から生きて戻れるものならな
あの娘と一度ゆっくり話をしたかった

立てこもる谷の人々に向けて「なあと穴にぶち込めば」と砲弾を撃ち込むように提案しようとしたクワトロの発話に割り込み(会話を中断させ)、「提案を却下する」という直接的な命令を避けるため、独り言の形式で聞き手に自身の心情・意図を伝えている。

映像では、クシャナはクワトロを見ずに、谷の人々が立てこもっている廃船の方に顔を向けたままである。ここは司令官の立場としては部下の提案を受け入れるのが順当な対策であることをわかってはいるが、あえてそうしない(したくない)ので、間接的に中止命令を伝えているのである。

このような方略(ストラテジー strategy)は非明示的に行うので、「ほのめかし」(オフレコード off record) という。滝浦真人(2008)は、オフレコードの定義を「事柄を明示的に伝達することよりも、相手と自分のフェイス侵害を避けることを優先して、用件への直接的な言及を回避するストラテジー。」とする。新井巧磨(2010)は、「オフ・レコード・ストラテジーが採用されやすい場合は…話し手が単純に」「当事者間の相対的な心理的距離感」「を変化させたくないと考えている場合である。」と述べる。また、福田(2013)は、「発話行為の意図が聞き手にとって非明示(implicit)である発話」としたうえで、「独り言的な形を取っていても、まずなによりもその発話が相手に聞こえることを意識し、なんらかの推定的な情報が伝わることを意図している。」と述べる。

オフレコードは、聞き手がくみ取ってくれることを意図したものであり、言外にほのめかすことで相手との距離を保つということでもある。クシャナからすれば自身のフェイスを保持するために行う「立場上の回避行動」である。むしろ現実世界に近い言語行動とみられる。また、福田(2013)は、話し手が発話意図を明示しないことで、発話が生じさせるかもしれない「FTAの責任」を取らなくてよいという特徴があると述べる。「相手の話に割り込む(interrupt)」や「遮る(block passage)」FTAはインポライトネスストラテジー、つまり、相手のフェイス侵害を目的として意図的にその行動を行う、あるいは起こりうることを相手に気づかせる言語行動の一つであるが、責任を回避する方法の一つでもあるので、「回避的方略」と呼ばれる。この「回避」には「よい、悪い」という価値判断を一切含まない。話し手の意図を伏せようとするということであり、責任放棄とは違うものである。

この「回避的方略」は、城オジの発話態度にも確認できるので、「大人語」という感覚で、年相応のキャラに使わせているようである。

【C4】は、米井(2011)が作品の言語表現の性格が端的に示されていると指摘した「あんたも姫様じゃろうが わしらの姫様とだいぶ違うの」という台詞が語られる場面である。クシャナと城オジとの対話をポライトネス理論の観点から検討してみたい。

【C4】クシャナと城オジ C19 1:32:09～

クシャナ どうだ 決心はついたか
降伏を勧めに行くなら放してやるぞ ペジテの二の舞にしたいのか
ギックリ あんたも姫様じゃろうが わしらの姫様とだいぶ違うの
ゴル この手を見てくだされ ズル様と同じ病じゃ
あと半年もすれば石と同じになっちゃう
じゃが わしらの姫様は この手を好きだと言うてくれる
働き者のきれいな手だと 言うてくれましたわい

クシャナ	腐海の毒に侵されながら それでも腐海と共に生きるというのが
ギックリ	あんたは火を使う そりゃわしらも ちょびっとは使うのが
ゴル	多すぎる火は 何も生みやせん 火は森を一日で灰にする
	水と風は百年かけて森を育てるんじゃ
ギックリ	わしらは水と風の方が ええ ← off record 開始
ニガ	あの森を見たら 姫様悲しむじゃろうのう
戦車兵	参謀殿 命令はまだですか
クロトワ	引っ込んでろ
	何があったか知らねえが かわいくなっちゃってまあ
クシャナ	クロトワ その者たちを放せ
クロトワ	はっ それでは待ちますか
クシャナ	兵に食事を取らせろ 1時間後に攻撃を開始する
クロトワ	メシねえ ゆっくり食うことにしますか

クシャナの問いかけ「降伏を勧めに行くなら放してやるぞ」に対して、城オジたちは「あんたも姫様じゃろうが わしらの姫様とだいぶ違うの」と返し、別の話題を語り始める。しかし、クシャナはクロトワにするようなFTA（話を遮る、割り込む）をせず、その話題に関連する問いかけまでしている。対話の途中、ギックリの「わしらは水と風の方がええ」という台詞を境に城オジたちは視線をクシャナから外し、周りに聞こえるように独り言を言う。いわゆるオフレコード方略を行う。そして城オジたちがクシャナから視線を外した後、クシャナも相手から視線を外し、ニガの「あの森を見たら姫様悲しむじゃろうのう」という独り言を聞きながらその場を立ち去る。クシャナの城オジたちに接する態度は明らかに配下のクロトワに対するそれとは違う。この異国の年長者に対する態度からはクシャナが「姫という立場」をしっかりとわきまえていることがうかがえる。城オジからすれば、聞き入れてくれないとわかっていても、それでも想いを伝えたいという切実な内情がある。「人々が静かに暮らす風の谷への思い、ナウシカへの思い」を踏みにじるような態度をクシャナは取らない。異国の年長者に対してはFTAをしないように明らかな配慮行動が見られるのである。

むすび

これまで、「風の谷のナウシカ」の二人のヒロイン、ナウシカとクシャナを中心に、役割語が効果的に使われるヴァーチャル世界でみられる言語行動について、ポライトネスの観点から談話例を提示して検討してきた。

ナウシカは、〈男性語〉と〈女性語〉を併用することにより、やわらかいことば遣いと毅然としたことば遣いを切り替えるスタイルを持つ印象を見る側に与える。16歳という年齢設定に相応した、ステレオタイプな言語行動がみられる。自分の内面を素直に表に出すヒロインとして描かれている。

クシャナは、トルメキア王国の姫であり、また軍の司令官という立場をわきまえた言語行動をする。〈男性語〉専用で、命令・依頼表現では命令形をとり、聞き手のフェイスを否定的に評価するという方略を多用するので高圧的な印象を見る側に与えるが、ポライトネスの観点から検討すると随所に相手への配慮がみられる。非明示的な方略は日本語表現の大きな特徴の一つでもあり、その意味では実はクシャナの方が日本人的言語行動の典型として描かれているといえるだろう。

話体（役割語）の使い分けの濃淡や言表態度の振り幅は、現実のことばと多少の違いはあ

るものの、現実世界の言語特徴をどのように仮想現実には写しているかという視点でジブリ作品をみると、私たちの言語行動の特徴に気づくことがたくさんあるだろう。

注

注1 宮崎駿(1983) 巻末の後書き「ナウシカのこと」には、次の記載がある。「ナウシカは、ギリシヤの叙事詩オデュッセイアに登場するパイアキアの王女の名前である。…中略…ナウシカ—俊足で空想的な美しい少女。求婚者や世俗的な幸福よりも、豎琴と歌を愛し、自然とたわむれることを喜ぶすぐれた感受性の持主。…中略…ナウシカを知るとともに、私はひとりの日本のヒロインを思い出した。…中略…虫愛ずる姫君と呼ばれたその少女は、さる貴族の姫君なのだが、年頃になっても野原をとび歩き、芋虫が蝶に変身する姿に感動したりして、世間から変わり者あつかいにされるのである。…中略…私の中で、ナウシカと虫愛ずる姫君はいつしか同一人物になってしまっていた。」

注2 序盤から中盤までのストーリーの概略を次にまとめる。

「火の七日間」と呼ばれる最終戦争が文明を崩壊させてから千年後、世界は猛毒を放出する菌類の森(腐海)に覆われた。生き残った人類は、森の毒と巨大な虫たちに脅かされていた。辺境の峡谷にある風の谷は風により瘴気から守られ、質素な農耕生活を送っていた。族長ジルの娘ナウシカ(16歳)は武術に優れながらも、自然を愛し腐海の虫たちと心を通わせる少女でもあった。

腐海から浸食されている人類の未来をめぐり、軍事国家トルメキアと工房都市ペジテが対立し、「巨神兵」と呼ばれる最終兵器の争奪戦が行われる。巨神兵を復活させ、人類が倒せない腐海の主、王蟲の大軍を焼き払う計画があったが、その巨神兵の保有権を巡り、二つの国で戦闘が続いていたのだった。トルメキアはペジテに侵攻し、巨神兵の卵を奪う。

しかし、トルメキアの飛行船がナウシカの住む風の谷に墜落したことから、二つの国の争いに風の谷が巻き込まれていく。トルメキアの人質になったナウシカは、トルメキアへ送還される途中、ペジテの残党との空中戦で撃墜された飛行船から司令官の皇女クシャナ(25歳)とともに脱出し、腐海に不時着する。

同時に墜落したペジテのアスベル王子(16歳)と、腐海最深部に至り、そこで腐海の真実を知ることになるが、風の谷では、人々が占領軍に抵抗し、トルメキア軍と対峙する。

注3 金水敏(2003)では役割語を次のように定義する。

ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと、特定の人物像を思い浮かべることができるとき、あるいは、ある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使いそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

注4 一人称は「わし」、文末詞に「ぞ、じゃ、のう」、ウ音便(「言うとります」など)を用いるなど、役割語としての老人語をベースにして描かれる。

注5 クロトワはクシャナ配下の軍参謀で、平民出身の27歳という設定である。クシャナに対するときは敬語を使うが、自分の部下に対するときや独白の話体は東京下町風の男性の若者語を使う印象を視聴者に与える。

「貧乏軍人のオレですら久しくさびついていた野心がうずいてくらあ」

「けっ笑ってやがるてめえなんぞはこの世の終わりまで地下で眠ってりゃよかったんだい」

相手や場面に応じてことば遣いを切り替える。

参考文献

- 米井力也 (2011) 「『風の谷のナウシカ』と役割語－映像翻訳論覚書－」『役割語研究の展開』(金水敏編くろしお出版)
- 斎藤美奈子 (1998) 『紅一点論—アニメ・特撮・伝記のヒロイン像』ビレッジセンター出版局 (ちくま文庫 2001 再販)
- 米川明彦 (2002) 「現代日本語の位相」『現代日本語講座 4 語彙』(飛田良文・佐藤武義編 明治書院)
- 金水 敏 (2007) 「近代日本マンガの言語」『役割語研究の地平』(金水敏編くろしお出版)
- 金水 敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店
- 川村陽子 (1998) 「対人コミュニケーションにおけるポライトネスの諸相」『人間と環境－人間環境学研究所研究報告』2 岡崎学園国際短期大学人間環境学研究所
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
- 福田一雄 (2013) 『対人関係の言語学ポライトネスからの眺め』開拓社
- 野田尚史 (2014) 「配慮表現の多様性をとらえる意義と方法」『日本語の配慮表現の多様性－歴史的变化と地理的・社会的変異－』(野田尚史・高山善行・小林隆編くろしお出版)
- 石黒 圭 (2013) 『日本語は「空気」が決める社会言語学入門』光文社新書
- 新井巧磨 (2010) 「ポライトネス理論におけるフェイス実現アプローチ」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』17-2
- Goffman, Erving (1967) *Interration Rituals : Essays on Face-to Face Behaviour, Double day Anchor* (広瀬英彦・安江孝司訳 (1986) 『儀礼としての相互行為』法政大学出版局)
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987) *Politeness : Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press, (田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』研究社)
- 高橋永行 (2016) 「方言に対する社会共有イメージとステレオタイプの形成～松本清張『砂の器』、氷室冴子『海がきこえる』を資料として～」『米澤國語國文』45 山形県立米沢女子短期大学国語国文学会

資料

- 宮崎 駿 (1983) 『ANIMEGE COMICS ワイド判 風の谷のナウシカ』1 (徳間書店)
- 『アニメージュ増刊映画「風の谷のナウシカ」ガイドブック』(1984 徳間書店)
- BD) 宮崎駿監督作品『風の谷のナウシカ』スタジオジブリ製作 ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン販売 (2010年7月14日発売)

付記

本稿は、2017年6月30日(金)に開催された、平成29年度山形県立米沢女子短期大学公開講座「ジブリ世界に生きるひとびと」第1回「風の谷のナウシカにみる、登場人物のことばづかい～‘らしさ’の言語学～」で話した内容を書き改めたものである。